

## 地域生活と社会教育（その3）

神 田 嘉 延

(1994年10月17日 受理)

Community Life and Adult Education

Yoshinobu KANDA

### 目 次

#### 第一章 地域生活と社会教育の問題所在

- (1) 地域生活の構造と社会教育論
- (2) 地域生活構造論からみた小川利夫の社会教育論の検討
- (3) 小林文人の沖縄民衆史研究の字公民館論の検討

#### 第二章 市町村自治体の地域づくりと公的社会教育論

- (1) 一般行政と社会教育の関係論
- (2) 地域開発問題と社会教育計画論（鹿児島大学教育学部紀要43巻）

#### 第三章 農村の生活文化と社会教育

- (1) 農村の生活文化からみた宮原誠一氏の社会教育論の検討
  - 1 農村生活文化の歴史的継承と発展段階－宮原誠一の歴史的範疇としての社会教育論の検討－
  - 2 宮原の社会教育の歴史的発展形態論
  - 3 日本の「社会教育」行政史についての宮原の問題把握－1920年代の文部省「社会教育」行政の整備をめぐって－
  - 4 農村の民主化と社会教育－宮原誠一の戦後民主化と社会教育論の検討をとおして－（鹿児島大学教育学部紀要 第44巻）
- (2) 民衆の精神と社会教育－和歌森太郎「庶民の精神史」の検討を中心にして－
  - 1 日本の近代化と民衆の精神史
  - 2 若者組と村の規範意識
  - 3 民衆の生活規範と個性・自立
  - 4 庶民の自然観の歴史性と人間の生存の価値
- (3) 農村文化運動論－真壁仁「野の文化論・教育論」を中心にして
  - 1 百姓としての文化人
  - 2 地域の個性化・自治と野の文化
  - 3 近代主義の問題と農民の主体形成（鹿児島大学教育学部紀要，本巻）

## 1 日本の近代化と庶民の精神史

和歌森太郎氏は、一貫して学問の方法として民衆生活に基盤をおき、民衆の未来の方向性を示すという問題意識をもっていた。その立場から歴史学と民俗学の方法を駆使している。そして、民衆の生活文化、民衆の精神史を鋭く探究した研究者である。さらに、彼にとって、民衆の精神史を探究していく基本的方向性は、民主主義の精神の確立というところに出発点があり、その民主主義にとって克服していくべき阻害要因を日本の庶民の精神史のなかに求めたのである。

現在の歴史学界は民衆のための歴史学を標榜しているが、民衆を啓発して、指導していこうという啓蒙主義にとらわれており、民衆の生活意識からの問いに答えるということになっておらず、民衆のための知恵になる歴史学になっていないと和歌森氏は次のように指摘する。

「現代日本の歴史学界は、スローガンのようにして民衆のための歴史学建設を標榜している。しかしそれには、民衆を歴史によって啓発し、指導していこうとする意識があるようである。あるいは歴史を押しつけて、どうだ、しっかりしろといわんばかりの姿勢をとっている。その場合の歴史というのは、その歴史家にとって、既成の体系によりかかった歴史である。民衆の生活意識に発する問題に即して、その問いかけに答えるための史実を選んで構成した歴史ではない。これでは、歴史がほんとうに民衆の知恵とならないのではないか。学問はいったい誰のためにするのか。自分の好奇心を満足させるだけのものであってよいはずがない。……もっと民衆生活に寄りよったところで問題をおこし、その身辺の話題から日本歴史を掘り下げることをしてよいではないか」。<sup>(1)</sup>

民衆生活の過去について復元できるのは、民俗学の方法であると。そして、その方法により、文字の世界だけしか知らないものには解釈できない歴史が理解できるのであると民俗学の重要性をのべる。

「民衆生活の過去について、今日見聞される伝承的事実を素材として復元できるのは民俗学である。伝承は言、行、意、つまり口伝そのもの、行為行動に伝わるもの、意思感情、要するに観念で伝わるものと三類ある。もともと民俗学は、文字を書くことが不得意であったり、文字をあやつることができる人たちから無視されてきたような、民衆の生活の過去を顧みていく学問であったために、いわゆる歴史の史料にはとどめられない部面の歴史を探究する性質のものであった。しかし、よくよく過去の記録文書をたずねてみれば、一応文字をもって伝わらなかった伝承を私たちが知っている、そこに書かれたことを十分に具体的に想察していく手だてを得られるのである。文字の世界だけでしか知らないものには解釈のつかないことも、民衆生活の伝承的な事実を知っていれば、解釈できるわけである」。<sup>(2)</sup>

歴史教育の方法においても教師は、社会の問題と子どもの問題を結びつけていくうえでの適切な教材づくりとして民俗学の知見が重要であるとする。「学習効果をあげるためには問題意識のすぐれていることが必要であるが、その問題意識は、多分に教材の深い理解からも高められるものである。また、学習活動の指導としても、教材をよりよく理解しておるならば、以外に子供に親しめる活動を計画することができる。ことに、そういう点では、過去の歴史の中でも、生活史に多分にか

かわりをもつ民俗学の知見が重要であると思う。社会科のあるいは社会生活の問題に触れるものは、一般の社会経済史を中心とした歴史学の成果よりも、民俗学から供給される事実のうちに拾い上げられると思う。学習活動にしても、卑近な郷土の生活の民衆の実践を具体的にとらえてかかる民俗学のいき方から多く示唆されるのであろう」。(3)

日本の近代化は、文化の二重性をもって展開してきた。西洋文化による近代化と民衆の生活の伝承的文化と大きなギャップをもっていたことが、国家主義的な教化体制に巻きこまれ、個々人の自由自立をはからないものになった。国家主義に対する批判的精神を全国民的なものにさせることができなかつた、線香花火のような運動ですぎなかつたことも西洋文化からの啓蒙主義的な面からの批判であり、民衆の伝承的な生活感情と結びついたものでなかつたことに起因すると和歌森氏は指摘する。

「啓蒙思想家の活発な動きにもうかがわれるように、近代的な精神がヨーロッパからもかなり摂取され、来朝した外国人を通して、あるいは日本人の海外渡航を介して、新しい進歩的な考え方も一部には取り入れられたけれども、そういうものが国民の血肉にはなかなかかなりがたいものであった。また、その取り入れ方が、うわすべりの吸収であったために、とかく観念的になり、実際の同胞の生活に即して、その経験にかんがみて新しい思想を自分なりに消化するということがなかつた。……明治以来の文化の進め方がそうした形をもっていたために、学問、芸術その他にいちじるしい西洋化が進められはしても、その文化を従来の日本人の生活経験に融合させて取りこもうとする余裕をもたなかつた。これまでの日本文化の歴史では、大陸から取り入れられたものと、日本人なりの民俗に残っているものと結びつけながら、いわゆる習合を続けて、そして同時にそれぞれの新しい時代らしい文化をつくってきたのであるけれども、近代以降においては、それがはなはだ乏しくなってあいまつた。古いものと新しいものとの画然とした差があり、新しいものがすなわち西洋風であり、旧来のものが封建以前のものである、といったような差別がついてしまった。……そうしたギャップのために前に述べたような政治、教化の面での国家主義な、逆に言えば個人個人の自由自立をはからないいき方が、強力に貫くことができたのである。つまり、批判精神といったようなものを、全国民的なものにさせることができなかつたからである。明治以来、いろいろと政界を批判し、それにとまなう運動を展開したのものもあるけれども、たえずそれが線香花火のようになり、しっかりした国民世論を背負うことができずについたのは、そうした事情があつたからである」。(4)

和歌森氏は、近代的な精神がヨーロッパから日本に入ってくるが、それが、民衆の伝承的な生活意識と融合したものでなく、新しいものが西欧文化、古いものが旧来の日本文化というように民衆の生活文化にたいして差別がついてしまったとする。和歌森氏にとって、この日本の二重文化を克服するために、近代的な個の確立、近代の自由、自立という民主主義への展望をみだしていくために、民衆の伝承的な生活意識、民衆文化を明らかにしようとするのである。

日本は近代的な精神がヨーロッパのように個の確立のうえで、社会性、連帯性が課題になっていったのではなく、また、西洋のキリスト教的な精神によつての個々人に己を反省させ、生き方を考えて

いくという文化性がなかったと和歌森氏はのべる。

「日本では、歴史的に個々人を十分確立させ、それぞれを認めあうことに慣れていなかった。ヨーロッパでは中世封建社会が同時にキリスト教社会であった。こういう封建社会の中では、すでに個人に対する認識が深められざるを得ぬ事情にあった。個人の良心を注視したり、自省したりすることに馴れていた。……日本では、明治以前の封建社会には、キリスト教社会が培うような精神傾向があり得なかった。宗教は無きに等しかったし、思想や学問の世界でも、それに代わって、個人の確立を意識させるような教学に乏しかった。これをうけた近代日本では、個人主義の確立がはなはだ困難であった」。<sup>(5)</sup>

個人主義の確立は、ヨーロッパの歴史性と異なり、その精神的な歴史基盤が日本にとってはなく、日本の近代化には、特別に個人の確立を意識する精神的訓練が必要であったとするのであった。和歌森氏は、日本の近代的な個人主義の確立の未熟を封建時代の精神的な意識まで逆上って考えているのである。かれにとって、理性的に個々人をみつめる意識は、近代化という課題にとって不可欠な精神であったとする。

日本の近代化にとって、個人主義の確立は大きな課題として和歌森氏は設定するが、それは、ヨーロッパ的な文化のストレートな輸入ではなく、日本の伝承的な民衆の生活意識と結びつかねば国民的なものにならないとした。明治の近代化のなかで、若者組の伝承をやめて青年会に代えていったのも民衆の生活意識を考慮せずに、村を近代化していった事例のひとつであった。若者組は、村の協同労働の組織としての機能と婚姻媒介的機能を伝統的にもち、江戸時代になって、さらに、村の治安や消防の機能という自治的機能を担わされたようになったと和歌森氏は指摘する。近代化はそれらの若者組のもっていた機能を奪っていくものであった。

「若者にありがちな風紀の乱れということも、これまた士族あがりの知識人によって強く非難されるようになり、為政者から白眼視されることになった。それで村の中でも率先して若者組の存続をあきらめ、夜学会をかわりに経営しようとした動きなどがあった。この夜学会などが、ちょうど明治十年代の、各地に自由民権の風潮が高まったころ、大いに討論学習をして、政治や社会についての知見をひろめようとする場合にもなった。それが発展して、新しく青年会を結集するとか、自治社などの素朴ながらの一つの政治結社としてのものをこしらえようという動きもあった。……明治二十年前後になると、若者組に対する風あたりはとりわけ強くなり、官吏の指導によって、青年の精神作興のための特殊な団体を別につくらせるようになった。その場合に、他日、日本臣民としての義務を尽くし得るような、そういう基礎を養うのだといったものである。そして、農事の改良、進歩のため研究することが、あわせてその使命とされた。自由民権の意識をもって勉強した夜学会なども、忠君愛国の精神、富国強兵にいかん貢献するかについて教えられる場となっていった。こうした状況の中で、若者組は自然にうしろに退き、青年会、青年団へと新しいタイプの組織が形成されていくのである」。<sup>(6)</sup>

農村の近代化のためと明治時代に称して行われていた通俗教育は、つまり社会教育が民衆のなか

に伝承的にあった若者組を解体していく役割を果たしていったのである。通俗教育という社会教育の機能の近代化の啓蒙は、民衆の生活意識の規範を破壊していく事でもあったのである。民衆の生活意識の規範を解体していくために、青年会、青年団などの夜学会などの青年の学習活動は、農事改良、農村の革新ということを求めたが、それは、伝承的な民衆の生活意識を否定して、忠君愛国の国家主義精神、富国強兵に貢献していく場となったことを和歌森氏は指摘する。明治の文明開花という近代化によってつくられていく青年団は、忠君愛国、戦争協力というなかでの国家にたいする健全、善良ということで、旧来の若者組の慣行、生活規範を風紀の乱れと称して改善することにしたのである。このために、通俗教育が国の社会教育施策として積極的に行われていったのである。つまり、青年団への組み替え指導にみられるように、明治の文明開花、近代化、西洋化の文化のとりいれは、民衆の生活意識から生まれてきた精神的基盤を否定して、新しく中央集権国家体制のために天皇を中心とする忠君愛国、富国強兵へと国民を動員していくものであったという把握は重要である。

## 2 若者組と村の規範意識

若者組から青年団の組替えは、旧来の若者組の組織の全くの解体ではなく、むしろ、その組織をのこしながら活動内容の指導をとおして変えていったのである。従って、忠君愛国、富国強兵ということから旧来の若者組の規範を利用できるところは、そのままとりこんでいったのである。若者組の村の治安的機能や消防的な機能は、そのまま残されて青年団の仕事とされていくのである。取締りの対象は、若者組の中にあった村の若い男女の交際的機能、若者のいこいの場としての若者宿の機能、若者が自主的に相談したり集会したりする機能であった。これらは、風紀の乱れと称して健全、善良なる国民としての通俗教育が叫ばれたのであり、取締りが強く行われたのである。この風紀の乱れといわれた若者組を和歌森氏はどのように民俗学、歴史学の視野から考えているのだろうか。

若者組の問題性として、自分の村が世間そのものであって、広い一般公共社会を意識することが弱かったため、部落根性が強く閉鎖的であると和歌森氏は次のように指摘する。

「若者組のものなどは、自分の村の娘は自分たちが支配しているはずのものであって、これがよそのものと結婚をすることについては、非常な反感を覚えたものであった。村内の男女の間ならば、姦通も大目に見られたけれども、どちらかが外のものであると、ひどい制裁を受けたのである。……今日の婚姻習俗の中にも、よそから迎えられてくる嫁入りが行列に対して水を浴びせるとか、どろをかけるとかいう類のいたずらめいたことが行われたりするが、これはそういう村外婚に対する閉鎖性を強くもった若衆の意識が、しからしめているのである」。<sup>(7)</sup>

村の共同体意識はよそからの者を含まない同質なつきあいの関係であったことを和歌森氏は強調する。通婚圏も江戸時代に入って部落外へ移る傾向をみせているが、村落内の結婚を若者組の一般的な生活意識であるとのべ、そこに、部落根性や閉鎖性の意識をみることができるとしている。通

婚圏の民俗学的な実証研究によって、この問題を深めていく必要があるが、部草根性という村落内の閉鎖性の問題と村落ごとを結びつけてきた生活必需品などの交換の発達、交通の発達からその閉鎖性を考えていく必要がある。閉鎖性という側面は、水利権や山の入会権などの村の共同所有・占有からの相互の争いが基盤にあるが、部草根性という閉鎖性が村落共同体の伝承として宿命論とする見方は理解しがたい。

和歌森氏の若者組の起源は、中世の郷村の成立ころからの村の自治組織のなかから生まれてきたものであるとする。封建体制の成長にともなって現れた組織であり、封建的支配機構に強力に組み込まれた組織であるとする。

「おそらく郷村が成立したころから、若者組は、村落社会を組みなす一環として重要な意義をもってきたのであろう。村の自治意識が鋭敏となって、村人の中でその秩序をたてまもる傾向が熟してから、指導者層としてのオトナとあいまって、労役者層としての若衆がまとまりをもつに至ったのである。今日伝わっている村の若者組は、そうした村人の、村としての体制が確立してから後の労働組織に由来する。いいかえれば、それは封建体制の成長にともなって現れた産物である。ことに江戸時代の強力な封建的支配権力に利用され、その機構の中に組みこまれたことによって、とくによく存続することができたのである。江戸時代の村は行政上の重要な単位となったが、その中にまで中央的な権力の担い手、たとえば警察役人のようなものをおかずに、村人としての村役人を媒介とするだけで、だいたいはいこれまでの自治的な社会律を利用する方針で、その土地なりの運営にまかせ、ただ監視的な立場をとったところから、若者組が一層強化される理由があったのである。……ことに若者たちは、その連帯共同意識、自村中心主義、言いかえれば他村に対する反発意識を強くもっていたことから、村連合を恐れる封建的為政者からみて、都合のよいものであったのである」<sup>⑧</sup>

若者組は封建的支配権力に利用された組織として位置づける。若者組は封建的な権力の末端機構として機能した村の村方三役の自治的な社会律のなかで一層封建的体制の担い手として強化されたとするのである。若者組が自村中心主義で村の連帯意識は他の村におよばないことから封建的な支配にとって都合のよいものであったと和歌森氏は指摘するのである。

若者組を江戸時代の村落支配のうえでの重要な組織として機能したとする和歌森氏であるが、同時に、若者組を通過儀礼的な側面から青年期の婚姻媒介と一人前の労働組織から村落の年齢階梯組織として考えている。通過儀礼の成年式は、その起源も中世末期以前にまでさかのぼっている。民俗用語としてのヘコイワイは13歳から15歳になると祝う風習が多く、結婚可能性を社会的に承認することと、一人前の労働力と発揮できる時期から若者組に加入する条件となっているとする。

「こうして結婚可能性を獲得したことの社会的承認を得ると、その社会での重要労働力ともなったのである。したがって青年という時期を、もうひとつの面からいえば、一人前の労働力を発揮する時期から、公に対しても一人前としての賦課に応じうる段階までの時期だったといえる。……とくにフンドシ祝いとともに、若者組に加入することになっていたと伝えるところの多いのは、青年期に入って、村の労働組織にくみこまれるに至るという事実を示すものであった。一人前の労働

